

夕
雨
子

三
浦
哲
郎

夕雨子

昭和四十六年六月三十日 第一刷発行
昭和四十六年七月二十四日 第二刷発行

著 者 三浦哲郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二 郵便番号 一二二

電話東京〇三九四五一一二二（大代表） 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製製本株式会社

定 価 五四〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

© Tetsuo Miura 1971, Printed in Japan



目次

父恋うる夕雨子

愁い多き夕雨子

風花のなかの夕雨子

風薫る五月の夕雨子

晩夏を飛ぶ夕雨子

巢に帰る夕雨子

あとがき

259 213 177 133 93、53 5

題字 三浦哲郎
裝幀 丹阿弥丹波子

夕
雨
子

父恋うる夕雨子

一

旅先の宿で、独りで夕食を済ませ、ゆっくりお茶など飲んでゐる氣にもなれずに、そそくさと鏡台の前に膝を崩して踊り子の顔を作りにかかり、パフで鼻筋を叩く段になると、どういふものか、きまって閉じた瞼の裏側がじいんと熱くなってくる。

それがなぜなのか、夕雨子自身にもわからない。

旅に出ると、ずっしりと重たい衣裳袍をほとんど独りで持ち歩くせいとか、化粧の手つきが妙に覚束なく、パフにも、つい白粉おしろいをつけ過ぎがちで、それを鼻筋に叩くと、忽ちもおっと、うつかりすると噎せかえるほどに顔が白粉の霽しに包まれてしまい、目をきつくつむってそれが霽れるのを待っていると、なぜだか瞼の裏側がじいんと熱くなってくるのである。

白粉の霽を吸うまいとして、息を詰めているからだろうか。それとも、夕食のとき、氣付けにコップ一杯だけ飲むならわしの、冷たい地酒のせいだろうか。それとも、ほかに、自分ではそれと気づいていない、なにか原因でもあるのだろうか。

なんのせいかわからないが、わからないままに夕雨子は、ああ、今夜もまた臉が火照ってくる、と、そう思う。そのときの、熱さと一緒に臉の裏がしっとり潤ってくるような感じが、夕雨子は好きだ。不思議と気持ちが落着いてくる。軀の内も外も、しんと静まり返ってくる。このまま目を開けたくない、いつまでもこうして臉の熱さと潤いをじっと味わっていたい、そう思う。

実際、夕雨子は、薄い座布団にべたりと尻を落し、すこし猫背になって、もうとつくに白粉の霽が霽れているのに、まだ目をつむったまま、しばらくじっとしていることがあった。

今夜も、炬燵のそばに引き寄せた鏡台に斜めになって、パフの手を休めて目を閉じたままじっとしていると、むこうの通りから響いてくる車の騒音が、さっきより変に遠くきこえる。音をばかして聞かせる紗幕があるなら、それが一枚、窓の外に垂れ下っているかのようだ。

出窓の障子を開けてみると、外はいつのまにか雪になっている。

新潟の夜は三度目だが、雪をみるのはこれが初めてである。

手鏡で、目張りを入れていると、電話が鳴って、クラブ銀馬車からだというから、夕方会えなかった支配人からかと思うと、

「立川さゆりちゃん？　しばらくだったね。俺だよ。」

と、馴れ馴れしい男の声がきこえてきた。

どこかで聞いたような声だが、誰なのか思い出せない。

「どなただったかしら。」

「どなた、なんて柄でもないけどさ。忘れちゃったのかい。悲しいな……といっても、あれは去年、おとしの夏だったかな。」

すると、夕雨子はまだショウの踊り子になりたてのところで、そのころはいまのように銀座や赤坂の仕事がなくて、年中、旅から旅を渡り歩いていた。

そのころの、いつ、どこで会った男なのだろう。立川さゆりという芸名がすらりと出てきたところを見ると、相手もおなじ穴の貉くさくて、

「タレントさん？」

「そう。西部ガンだよ。」

西部ガン——そんなタレント、いたかしら。

「ほら、クレージー・サンズにいた……。」

そのクレージー・サンズには、確かに聞き覚えがあった。

「バンドだったかしら。」

「バンド？ 厭んなっちゃうなあ。コミックトリオだよ。四国の高知で一緒になったじゃないの。」

そういわれて、夕雨子は、あ、と思い出した。名前はすっかり忘れていたが、高知でおなじクラブのショウに出たことのあるコミックトリオの一人といえ、いちど軀に覚えのある相手

で、

「……思い出したわ。しばらく。」

われながら、野太い声が出た。西部は、気押されたようにちょっと口を噤んでいたが、急にへらへらと笑い出して、

「嬉しいね。そちらさんは近頃、めっきり貫禄をつけたってね。」

「そんなことないわよ。相変らずよ。」

「どうだか。あちこちで噂聞いているよ。銀座のキング・キングや、赤坂のカジノなんかにも出てるんだって？」

「……たまにね。」

「たまにだって、結構じゃないの。一流じゃないの。」

夕雨子は、黙っていた。別に、一流を自認しているわけではないが、東京の下町生まれにしては口が重い方で、言葉をピンポン玉のように弾き合う会話は、不得手なのだ。夕雨子は、誰かと口論しているときでも、途中でふいに、なにをいえばいいのかわからなくなってしまうことがある。

「ところで、俺、いま銀馬車にいるんだがね。」

と西部はいった。

「今夜は、あんたと一緒だよ。」

「あら。」

「俺もいまここにきてから、あんたと一緒だとわかって、びっくりしたんだ。俺、おとといまで金沢で、きのうはオフで、きょう新潟へきたんだよ。あんたは、きょう東京からきたんだって？」

「そうなの。新潟は今夜きりで、明日から東三条、高岡、金沢という順に廻るんだけど……。」

「じゃ、俺とは逆廻りだね。俺は新潟は今晚きりで、明日は札幌へ直行だよ。」

「札幌へ？ 大変ね。でも、そっちには相棒がいるから淋しくなくていいだろうけど。」

「相棒か。相棒はいることはいるけどね。」

西部の声がちょっと跡切れて、夕雨子は、あら、あたしたち、なに喋ってんだろう、こんな話ならショウの合間にいくらだって出来るじゃないかと気がつき、

「あたし、いま化粧の最中なのよ。そっちへいってから、また聞くわ。」

といって、電話を切ろうとすると、

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。」

西部はあわてて、実はあんたががこの楽屋へ入る前にちょっと耳に入れて置きたいことがあるのだといった。なにかと思うと、実はあれからまもなくコミックトリオは解散して、自分はいまアクロバットの踊り子とコンビを組んでいるのだという。

「といっても、俺はアクロバットなんて、出来やしないんだ。踊りはタップをすこしやるくら

いでね。まあ、みてくれればわかるけど、俺は引立役の道化でね。……ということで、よろしく頼むよ。」

西部は声を低くして、そういった。

そうか、と夕雨子は、彼が言外に匂わせたものを汲み取って、

「わかったわ。ゆきずりのタレントみたいな顔をしてればいいのね？」

「それほどまでにしなくてもさ、つまり……。」

「赤の他人、ということにして置けばいいんでしょう？」

「そういうこと。よろしく頼むよ。」

「わかったわ。」

電話を切って、炬燵のなかで冷えた手をこすり合わせていると、おとしの夏、玉石の涙を洗う夜の波音がきこえる高知の宿で、彼にほとんど力ずくで肌を合わされたときのことが、ずっと以前にみた古い映画の一と齟^{こま}のように思い出された。

もし、そのときの彼にいまでも憎しみを抱いていたなら、ここで逢ったが百年目だが、いまの夕雨子には、憎しみはおろか、そのときの記憶さえもう定かではない。

男は所詮、許すほかになく、厭なことは早く忘れてしまいうに限るという淡泊な姿勢が身についてたのは、少女のころ、二度目の父に虐^{しいた}げられながら育ったせいだろうか。

夕雨子は、西部がともなく、自分がともなく、なにか哀しく、滑稽で、手鏡のなかの踊り子

の顔に、ふっと鼻で笑ってみせた。

二

顔を作り終えて、窓越しに雪をみながらぼんやり煙草をふかしていると、帳場から電話で、クラブの車が迎えにきているという。オーバーを羽織り、衣裳鞆を両手で提げて、一段ずつ階段を軋ませていくと、玄関に、クラブの名の縫いとりのある海老茶のジャンパーを着た、まだ少年のような運転手が待っていた。

「バンマスが打ち合わせしたいからというので、早目にきました。」

「そう。御苦労さん。」

彼は、持ちましようといって衣裳鞆に手をかけ、う、と忽ち顔を赤くした。

「重いわよ。」

「なに、平気です。」

けれども、車のドアは夕雨子が開けてやらねばならなかった。うしろの座席に積みこむと、空いた場所が窮屈そうで、夕雨子は助手台に乗った。車はチェーンの音をさせながら走り出した。

「シヨウの人の鞆は、みなよく似てますね。格好も、重さも。」
少年のような運転手がいった。

重さはどうか知らないが、格好だけはよく似ている。ビニール製の箱型の鞆で、模様はチェックにきまっている。駅のホームなどで、そんな大型の鞆を重そうにしている人をみかけると、ああ、あれも旅廻りのシヨウ・タレントだなと、一目でわかる。

「でも、大変ですね、こんな重いものを独りで持つて歩くのは。」

「うん。でも、もう馴れちゃったから。」

「強いんですね。」

夕雨子はふと、もしかするとこの若者は、自分に鞆を持つてついてきてくれる男がいないのを、気の毒がつているのかもしれないと思った。

実際、旅に出てみると、そんな男を連れている踊り子はすくな少ない。なかには、衣裳鞆のほかには子供まで男に預けて、子守をさせている踊り子もいる。

夕雨子自身も、赤帽のいない駅の長い階段を昇り降りするときや、北海道の涯ての町で一晩中、窓ガラスが風にはためく音でまんじりとも出来ない夜など、いまここに誰か男がいてくれたらと、そう思うこともないではないが、それは、その時々、力のある手や、顔を埋めるための胸を貸してくれる相手がいてくれればいいだけで、別にきまった男でなければならぬというわけではない。

夕雨子は、自分が、もしきまった相手が出来れば自分から進んでその相手に奉仕する、そんなたちの女だということをよく知っている。